

樞密院會議筆記

大正九年五月十二日

正

- 一 國勢院官制
- 一 鑄道省官制
- 一 鑄道省官制及鑄道局官制施行ノ際ニ於ケル鑄道省及鑄道局職員ノ任用等ニ關スル件
- 一 各省官制通則中改正ノ件
- 一 文官任用令中改正ノ件
- 一 外交官領事官及書記生任用令中改正ノ件
- 一 奏任文官特別任用令
- 一 大正二年勅令第百六十二號任用令限又ハ官等ノ初叙陞叙ノ規定ヲ適用セサル文官ニ關スル件中改正ノ件
- 一 辯護士タル者ヲ判事檢事ニ任用スル場合ニ於ケル官等ニ關スル件

国立公文書館 利用上の注意

樞密院會議筆記及び同委員會議録は、非公開の席上における発言を記録したものであります。したがって当該発言者の共同著作物と解されまので、引用等発表に際し著作権法上の問題の生ずることのないよう特に御配慮願います。

国立公文書館	
分類	
配架番号	2 A 15-9 ④ D 445

樞密院會議筆記

- 一 國勢院官制
- 一 鐵道省官制
- 一 鐵道省官制及鐵道局官制施行ノ際ニ付ケル鐵道省及鐵道局職員ノ任用等ニ関スル件
- 一 各省官制通則中改正ノ件
- 一 文官任用令中改正ノ件
- 一 外交官領事官及書記生任用令中改正ノ件
- 一 奏任文官特別任用令
- 一 大正三年勅令第二百六十二號任用年限又ハ官等ノ初敘陞叙ノ規定ヲ適用セザル文官ニ関スル件
- 一 改正ノ件
- 一 辯護士等者ヲ判事檢事ニ任用スル場合ニ於テ官等ニ関スル件

大正九年五月十二日 永曜日 午前十時二十分開
議

聖上臨御不被為在

出席員

清浦副議長

大臣

原

内閣總理大臣
兼司法大臣

五番

加藤海軍大臣

六番

内田外務大臣

七番

田中陸軍大臣 九番

山本農商務大臣 十番

床次内務大臣 十一番

中樞文部大臣 十二番

野田逋信大臣 十三番

顧問官

伊東顧問官 十四番

細川顧問官 十七番

九鬼顧問官 十八番

金子顧問官 十九番

末松顧問官 二十番

南部顧問官 廿一番

濱尾顧問官 廿四番

曾我顧問官 廿五番

穗積顧問官 廿六番

安廣顧問官 廿七番

岡部顧問官 廿八番

黒木顧問官 廿九番

一木顧問官 三十番

久保田顧問官 卅一番

富井顧問官 卅二番

井上顧問官 卅三番

平山顧問官 卅四番

石黒顧問官 卅五番

有松顧問官 卅六番

關席員

山縣議長

皇族

裕仁親王 一番

貞愛親王 二番

載仁親王 三番

依仁親王 四番

大臣

高橋大藏大臣 八番

顧問官

樺山顧問官 十六番

都筑顧問官 廿二番

三浦顧問官 廿三番

委員

横田法制局長官

馬場法制局参事官

以上各件ニ付

鈴木司法次官

辯護士タル者ヲ判事檢事ニ任用スル場
合ニ於ケル官等ニ對スル件ニ付

報告員

伊東審査委員長

書記官長

二上書記官長

書記官

清水書記官

村上書記官

議長(清浦) 本日 聖上陛下ニハ御静養中ニテ

臨御ナキニ付之ヨリ直ニ開會ス

國務院官制

鐵道省官制

鐵道省官制及鐵道局官制施行ノ際ニ於テ

ル鐵道省及鐵道局職員ノ任用等ニ関スル

件

各省官制通則中改正ノ件

文官任用令中改正ノ件

外交官領事官及書記生任用令中改正ノ件

奏任文官特別任用令

大正二年勅令第二百六十二號任用分限又

ハ官等ノ初叙陞叙ノ規定ヲ適用セサル文

官ニ関スル件中改正ノ件

辯護士タル者ヲ判事檢事ニ任用スル場合

ニ於ケル官等ニ関スル件

以上九件ヲ一括シテ議題トス此ノ中審査委

員會ニ於テ修正ヲ加ヘタルモノアリ先例ニ

依リ其ノ修正シタルモノヲ以テ原案ト為ス

第一讀會朗讀ヲ省略シ審査委員長ノ報告ヲ

求ム

委員長(伊東) 各位閣下容年六月三十日及其ノ

以後御諮詢ヲ蒙リタル國勢院官制外十六件

ニ関シ本官等審査委員ノ任ヲ辱クニタルカ

右十七件ノ中政府當局ニ於テ急施ヲ希望シ

タル朝鮮總督府官制中改正ノ件外七件ニ付

テハ前ニ本委員會ニ於テモ亦其ノ希望ニ應

ジ急速査覈ヲ遂ケテ本官等ノ所見ヲ復申シ

既ニ本院ノ決議ヲ經テ公布施行セラレタリ

爾来自餘ノ案件ニ付テモ亦屢次會合シテ當

局ノ辯明ヲ聽キ各員互ニ意見ヲ述、慎重熟
 議ヲ盡シ政府當局ト反覆交渉ヲ累ニ雙方協
 調ノ結果ヲ以テ茲ニ親シク各位閣下ニ報告
 スルノ時期ニ達シタリ
 國勢院官制外ハ件ハ其ノ内容ヲ分析スレハ
 或ハ官制ノ改廢ニ係ルモノアリ或ハ文官任
 用規程ノ變更ニ互ルモノアリ或ハ官等制限
 ノ特別規定ニ関スルモノアリ其ノ間必スレ
 モ不可分ノ連絡關係アルニ非スト雖既ニ一
 括シテ委員會ヨリ報告シ且本日ノ議題ニ供

セラレタルカ故ニ政府當局ノ言説ニ基キ各
 件ヲ通シ其ノ要旨ヲ一列開示シテ各位閣下
 ノ清聴ヲ煩サント欲ス

第一 國勢院官制

本案ハ現在ノ軍需局及内閣統計局ヲ廢止
 之新ニ國勢院ヲ設置セムトスルモノニシ
 テ其ノ理由ノ要點ハ(一)軍需局ノ事務ハ統
 計ヲ以テ基礎ト為ス隨テ統計局ノ事務ト
 密接ノ關係アルニ由リ此ノ二局ヲ併合セ
 ハ事務ノ連絡ニ於テ利便少カラズ(二)各部

共ニ現在ノ職負定負ヲ以テシテハ不足ヲ
 告クルモ之カ増加ハ經費ノ増額ヲ伴フ今
 之ヲ合一スルトキハ現在ノ規模ノ下ニ各
 部職負ノ相互援助ニ依リ幾分此ノ不足ヲ
 補フコトヲ得ヘシ(三)獨立官署トシテ軍需
 局ヲ特設スルハ平和克復ノ今日尚戰時氣
 分ヲ發揮スルノ嫌アリテ稍穩當ナラス之
 ヲ改メテ或ル官署内ノ一部局ト為スハ外
 形上體裁ヲ整へ實際上要務ヲ舉クルニ適
 切ナリト云フニ在リ而シテ新官制ノ名稱

ニ故ラニ軍需ノ稱呼ヲ避ケタルハ右第三
 點ノ理由ニ照應スルモノナリ
 國勢院ハ現在ノ軍需局及統計局ト等シク
 内閣總理大臣ノ配下ニ屬シ其ノ所掌ハ此
 ノ二局ノ事務ノ範圍ニ出テス同院ニ總裁
 官房ノ外二部ヲ置ク第一部ハ軍需局ニ該
 當シ第二部ハ統計局ニ該當ス本院ニ親任
 ノ專任總裁ヲ置ク蓋シ是レ現在ノ軍需局
 ニ於テハ内閣總理大臣ヲ以テ總裁ニ充ツ
 ルモ内外ノ機務ヲ掌ル首相ヲシテ真ニ其

ノ任ニ當ラシムルコトハ事實不可能ナリ
仍テ事務ノ遂行ニ凝滞ナカラシメムカ為
且統計局ト合シテ一官署ト為リタルカ故
ニ專任ノ高級長官ヲ置クノ必要アルニ依
ル本院ノ職員ハ總裁及従前ノ二局長ニ該
當スル部長二人ノ外參與書記官統計官其
ノ他總テ在来ニ局ノ職員ニ異ナラス但シ
現在ニ於テハ軍需次官ヲ置キ陸海軍次官
ヲ以テ之ニ充ツルモ本案ニ於テハ此ノ制
ヲ廢止シ唯陸海軍次官ヲ參與ノ列ニ加フ

此等各官ノ所掌事務ニ至リテハ何レモ從
前ト異ナル所ナシ

第二 鐵道省官制

現行鐵道院官制ニ依レハ鐵道院ハ内閣總
理大臣ニ隸シ國有鐵道及附帶ノ業務ヲ管
理シ地方鐵道及軌道ヲ監督ス而シテ鐵道
官衙ハ其ノ幹部タル中央官署ト其ノ支部
タル地方部局トヲ通シテ之ヲ本官制ニ收
メタリ然ルニ帝國ニ於ケル鐵道事業ノ現
況ヲ見ルニ其ノ線路ノ延長貨客ノ負數經

費ノ額職員ノ數其ノ他該業務ノ規模ニ照
シ内閣總理大臣ニ於テ自ラ手ヲ添メテ之
ヲ管轄スルハ其ノ各大臣ノ首班トシテ行
政各部ヲ統督スルノ地位ニ適合セス且殆
ト名實相副ハサルノ事態ヲ免レサルナリ
加之該業務ノ實質ハ優ニ其ノ中央官署ヲ
陞シテ一省ト為シ國務大臣ヲ以テ之カ長
官ニ任シ始メテ其ノ軀ヲ完ウスルノ氣運
ニ達シタルモノト謂フヘク即チ知ルヘシ
事此ニ出ツルハ獨リ鐵道事業ノ現状ニ適

應スルノミナラス又實ニ其ノ將來ノ發達
ニ裨補スル所以ナルコトヲ如上ノ理由ニ
依リ今回鐵道關係ノ中央官署ヲ鐵道省ト
為シ本案ヲ以テ其ノ官制ヲ設ケ同地方官
署ヲ鐵道局ト名ケ別案ヲ以テ其ノ官制ヲ
定メムトスルモノナリ
本案ニ依レハ鐵道省ノ所掌ハ從來鐵道院
ノ主管事務ニ加フルニ現ニ内閣總理大臣
ノ所管ニ属スル南滿洲鐵道株式會社ノ鐵
道及航路ノ業務ニ對スル監督ノ一項ヲ以

之入其ノ部局ハ鐵道本院ノ部局ト異ナル
 所ナリ其ノ職負ニ付テハ各省官制通則ノ
 規定ト相俟テ總裁副總裁ヲ大臣次官ト
 為シ理事又ハ技師ノ職名タリシ本院ノ局
 長ヲ官名ト為シ本院ノ參事秘書副參事參
 事補書記ヲ參事官秘書官書記官事務官屬
 ト為シ其ノ他技監技師技手ヲ置リコト從
 前ノ如シ要スルニ本案ハ其ノ形骸ニ於テ
 概テ各省官制ノ例ニ依リタルモノナリ
 第三 鐵道省官制及鐵道局官制施行ノ際ニ

於テハ鐵道省及鐵道局職負ノ任用等ニ関
 スル件
 本案ハ鐵道院官制ヲ廢止シテ鐵道省官制
 及鐵道局官制ヲ施行スルニ當リ從來ノ鐵
 道院職負ヲシテ引續キ鐵道省又ハ鐵道局
 ノ職負タラシムル為任用ニ関スル特別規
 程ヲ設クルコト其ノ主眼ニシテ即チ此ノ
 際現ニ鐵道院ノ副參事參事補技師書記技
 手鐵道手ノ官職ニ在ル者ハ此ノ際ニ限リ
 鐵道省又ハ鐵道局ノ各該當ノ官職ニ特ニ

之ヲ任用スルコトヲ得此ノ際現ニ各鐵道
管理局長タル理事並參事副參事參事補技
師書記技手及鐵道手ノ官職ニ在ル者別ニ
辭令書ヲ交付セラレサルトキハ當然鐵道
省又ハ鐵道局ノ各該當ノ官職ニ同官等俸
給ヲ以テ任セラレタルモノトス尚給與等
ノ基本タルヘキ在職年數ヲ定ムルニハ從
前鐵道院職負トシテノ在職ト今後鐵道省
又ハ鐵道局ノ職負トシテノ在職トヲ通算
スルコト及鐵道局書記ノ任用ニ付テハ當

ス從前ノ鐵道院書記任用ノ例ニ依ルコト
並此ノ際現ニ鐵道院理事ニシテ臨時西比
利亞ニ於ケル鐵道事務ニ從事スルモノニ
付テハ明治三十七年勅令第百九十五號第
一項及第二項ヲ準用シ該事務從事中ニ限
リ臨時具ノ官ヲ増置セラレタルモノトス
ルコト等ヲ本案ニ於テ併セ規定ス
第四 各省官制通則中改正ノ件

本案ノ内容ハ種錯綜シ數箇ノ事項ヲ包含
ス今其ノ要目ヲ三點ニ別チテ逐次開陳ス

ハレ

(一) 鐵道省ノ追加

本則第一條各省ヲ列舉スルノ條項ニ鐵道省ヲ加フ是レ鐵道省新設ノ必然ノ結果ナリ

(二) 參政官副參政官ノ廢止及勅任參事官ノ復活

各省ノ參政官及副參政官ハ大正三年十月ノ改正ニ依リ設置シタルモノニシテ之ト同時ニ從前ノ勅任參事官ヲ廢止シ

タリ抑同官ノ設置ハ所謂政務官事務官ノ區別ニ從ヒ次官ヲ以テ純然タル事務

官ト為シ別ニ專ラ政務官タルハキ者ヲ具フルノ趣旨ニ出ツ然ルニ次官及參政

官兩立ノ制ハ理論上適當ナルモ必スシテ實際ニ適切ナラサルコト現ニ大正五

年十月以降參政官及副參政官ヲ空位トスルノ實情ニ徴シテ之ヲ證スルニ足ル

仍テ今回次官ノ職責政務及事務ニ互ル

ノ趣旨ノ下ニ此ノ二官ヲ廢止シ同時ニ

各省參事官ノ中一人ヲ限り陞シテ勅任

ト為スコトヲ得ルノ制ヲ復活セムトシ

之カ為第十四條ニ於テ參政官及副參政

官ヲ削リ第十七條乃至第十七條ノ三ヲ

削除シ第十九條第二項ヲ加フ

(三) 各省官制ニ對スル準則規定ノ削除

(イ) 第十條第四項ノ陸軍省海軍省及逓信

省ニ限り大臣官房ノ事務ノ一部ヲ掌ヲ

シムル為特ニ局ヲ置クコトヲ得ル旨ノ

條項ヲ削除シ同條第三項ヲ改メテ各省

ヲ通シ其ノ便宜ニ從ヒ特ニ局ヲ設ケテ

大臣官房ノ事務ヲ處理セシムルコトヲ

得ルモノトシ(ロ) 第二十三條第二項ノ各

省專任ノ參事官及書記官ノ定員最多限

ニ關スル條項ヲ削除シ新置ノ第二十七

條第二項ニ於テ其ノ定員ノ規定ヲ各省

官制ニ一任ス

此ノ改正ノ結果各省官制ニ於テ大臣官

房ノ事務ヲ處理セシムル為特ニ局ヲ置

クコト及專任ノ參事官書記官ノ定員ヲ

定ムルコトハ全然各省官制通則ニ關係
ナキ事項ト爲ルナリ此ノ事タル恙ヲ樞
密院ノ職權ニモ直接影響スル所アルカ
故ニ更ニ後段ニ於テ詳述スル所アリ豫
メ各位ノ注意ヲ求ムル爲一言ス
其ノ他第二十四條第一項ニ於テ大臣官房
及局中各課ノ課長ハ奏任官又ハ判任官ヲ
以テ之ニ充ツルノ規定ナリ之ヲ改メ高等
官ヲ以テ之ニ充ツルモノト爲スハ今日ノ
實情ニ適應セムトスルノ趣旨ニ外ナラス

第七條第二項但書ノ地方廳視學官ノ進退
上奏ニ関スル規定ヲ削除スルハ明治三十
八年四月同官廢止以後之ヲ存置スルノ必
要ナキニ由ル又第二十六條ヲ削リ其ノ規
定ヲ第二十七條第二項ニ併スハ單ニ條項
ノ整理ニ過キサルナリ

第五 文官任用令中改正ノ件

本案ノ内容ハ左ノ三項ヲ包含ス

(一) 勅任文官ノ任用範圍ノ擴張

是レ本案ノ最大主眼ナリ現行規程ニ於

テハ勅任文官ハ高等試験ニ合格シタル
ノ資格ヲ有スル者ヨリ之ヲ任用スルヲ
以テ本則ト為ス是レ所謂普通任用ナリ
此ノ普通任用ノ資格ヲ有セサルモ所謂
自由任用ノ官以外ノ官例ハ教官技術
官ノ如キ官ニ在リテ相當ノ經歷アル者
ヨリ高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任
用スルコトヲ得ルノ途ヲ存スルニ止マ
ル是レ所謂特別任用ナリ然ルニ本案ニ
於テハ高等試験合格ノ資格ヲ有セスシ

テ若干期間自由任用ノ官ニ在リタル者
モ銓衡ヲ經テ之ヲ勅任文官ニ任用スル
コトヲ得又特定ノ資格及官歴ナキモ相
當ノ學識經驗アル者ハ高等試験委員ノ
銓衡ヲ經テ之ヲ少数ノ例外ヲ除クノ外
一般ノ勅任文官ニ任用スルコトヲ得ル
モノトス其ノ例外ニ屬スルモノハ地方
長官其ノ他地方ノ行政事務ニ鞅掌シテ
直接ニ人民ニ接觸スルモノ及特殊ノ職
掌ヲ有スル監察官等僅ニ十種ニ過キス

此ノ改正ノ結果中央ニ在リテ諸般事務
ノ樞軸タルヘキ各省局長即チ最モ重要
ナル普通任用ノ官ヲ廣ク學識經驗アル
者ヨリ銓衡ニ依リ任用シ得ルノ途開ク
ルコト特ニ注目スヘキ所ナリトス斯ノ
如ク勅任文官ノ任用範圍ヲ著シク擴張
スルニ付當局カ其ノ理由トシテ辯明ス
ル所ニ依レハ是レ畢竟時勢ノ變遷ニ考
ヘ諸般ノ事情ニ照シ適度ニ門戸ヲ開キ
テ適材ヲ適所ニ任スルノ趣旨ニ外ナラ

ス殊ニ輓近行政各部ノ要職ハ概テ高等
試験合格以來官等階級ノ秩序ヲ踏ミテ
漸次陞進シタル者之ヲ占ムルノ結果其
ノ施為往々在来ノ因襲ニ拘泥シテ世務
ノ活機ニ迂遠ナルノ嫌アルカ故ニ官途
ニ在リテ吏務ニ通スル者ノ外民間ニ止
マリテ學識經驗ニ富ム者ヲモ勅任文官
ニ拔擢シ以テ民間新鮮ノ空氣ヲ官場ニ
注入シテ官場ノ溜水ヲ一掃シ各競ヒテ
其ノ長スル所ヲ發揮セシムルコト各負

ヲシテ切瑳琢磨セシムルノ利得ニ加ヘ
テ行政事務ヲ刷新改善スルノ效益少カ
ラサルヘシ又近来俊秀ノ官吏ニシテ其
ノ職ヲ辭シテ民間ノ業務ニ就クモノハ
シトセサルカ故ニ之ニ因リテ生スル官
界ノ缺陷ハ民間ノ高材ヲ簡拔シテ之ヲ
補充スルノ途ヲ講セサルヘカラスト云
フ

(二)

判任文官ノ任用條件ノ輕減

現行規程ニ依レハ判任文官ノ任用資格

トシテ三年以上文官ノ職ニ在リタルコ
ト又ハ五年以上雇員タルコトヲ舉ゲタ
リ本案ニ於テハ各其ノ期間ヲ短縮シテ
二年又ハ四年ト為ス斯ノ如ク判任文官
ノ任用ヲ容易ナラシムルコト亦時要ニ
順應スル所以ナリト云フ

(三)

學校長ノ任用條件ノ變更

學校長ハ教官ニ非ス又之ヲ特別ノ學術
技藝ヲ要スル文官ト解セス然レトモ學
校長ハ其ノ職任ニ考ヘ專ラ普通ノ資格

アル者ヨリ之ヲ任用スルノ制ニ依リ雖
キカ故ニ之カ為特別任用ノ規程ヲ設ケ
テ其ノ條件ニ從ヒ特ニ之ヲ任用シ得ル
ノ途ヲ存スルコト通例ナリ本案ハ此ノ
情況ニ顧ミ且學校長教官ノ間ニ密接ノ
關係アルコトヲ念ヒ學校長ヲ教官技術
官其ノ他特別ノ學術技藝ヲ要スル文官
ノ班ニ加ヘ專ラ銓衡ニ依リ之ヲ任用ス
ヘキモノトス其ノ結果從前ノ學校長特
別任用ニ關スル規程ハ總テ不用ニ歸ス

第六 外交官領事官及書記生任用令中改正
ノ件

ルモノナリ
本案ハ前掲文官任用令中改正ノ件ニ於テ
學識經驗アル者ハ高等試驗委員ノ銓衡ヲ
經テ之ヲ一般ノ勅任文官ニ任用スルコト
ヲ得ルモノト為スニ照應レ之ト同一ノ理
由ニ依據シ特定ノ資格ナキモ相當ノ學識
經驗アル者ハ本令ノ規定ニ拘ラス單ニ高
等試驗委員ノ銓衡ニ依リ之ヲ勅任ノ外交

官又ハ領事官ニ任用スルコトヲ得ルノ
ヲ削クモノナリ尤モ本令第八條ニ依リ特
命全權公使及辦理公使ハ本令ノ規定ニ拘
ラス自由ニ之ヲ任用スルコトヲ得ルカ故
ニ本改正案ニ依リ銓衡ヲ經テ任用スルコ
トヲ得ルモノハ現行官制ノ下ニ在リテハ
大使館參事官及勅任總領事ノ二官ニ外
ヲサルナリ

第五條第二項ニ外務書記生試驗規則ハ外
務大臣之ヲ定ムル旨ヲ掲クルハ現行第七

條ノ規定ヲ其ノ儘轉置スルニ過キサルナ
リ

第七 奏任文官特別任用令

現行制度ニ於テハ奏任文官ハ高等試験ニ
合格シタル者ヨリ之ヲ任用スルヲ以テ本
則ト為シ特殊ノ官ニ付其ノ事務ニ関係
ル一定ノ官歴ヲ有スル者ヨリ銓衡ヲ經テ
特ニ任用スルノ途ヲ開ク為多數ノ特別任
用規程ヲ設ケタリ然レトモ此ノ制度ニ於
テハ甲官廳ノ事務ノ經歷アル者ヲ乙官廳

ノ官ニ任用スルコトヲ得サルノミナラズ
同一官廳内ニ於テモ當該事務ノ經歷アル
者ニ非カレハ其ノ事務ノ官ニ任用スルコ
トヲ得サルノ制限アリ斯ノ如キハ一面官
務ノ必要ニ應ジ他面優秀者ノ為進路ヲ開
クノ趣意ヲ實現スルニ十分ナラサルカ故
ニ本案ハ一般的ニ奏任文官特別任用ノ規
程ヲ設ケ別ニ定ムルモノヲ除ク外奏任
文官ハ五年以上判任以上ノ官ニ在職シテ
行政事務ニ従事シ判任官五級俸以上ノ俸

給ヲ受ケタル者ヨリ高等試験委員ノ銓衡
ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得ルモノトシ
以テ右ノ如キ制限ヲ撤廢ス而シテ各廳參
事官ノ中各省參事官ハ別案ヲ以テ之ヲ自
由任用ノ官ト爲シ其ノ他ノ參事官各廳書
記官外十七ノ官ニハ右ノ規定ヲ適用セズ
之ヲ普通任用ノ官ト爲ス蓋シ此等ノ諸官
ハ各廳事務ノ樞軸ニ當ルモノニシテ其ノ
職務ノ性質ニ考ヘ特別任用ヲ許スニ適セ
サルモノアルニ因ルト云フ

本案制定ノ結果從來ノ奏任文官ニ関スル
特別任用規程ハ概テ不用ト為ルカ故ニ関
係勅令合計六十三件ヲ廢止ニ唯判任官ノ
特別任用ニ付テハ仍此等勅令ノ該當規定
ヲ適用スルモノトス尤モ此等勅令中ニ學
校長ノ特別任用ニ関スルモノアリ之ヲ廢
止スルハ別案ヲ以テ學校長ヲ廣ク銓衡任
用ノ官ト為シタルニ由ル又一時便宜ノ經
過規定ニ屬スルモノ及既ニ廢止セラレタ
ル官ニ関スルモノアリ之ヲ廢止スルハ其

ノ存置ノ必要ナキニ由ル尚判任官ノ特別
任用規程ハ追テ別ニ整理スルノ意向ナリ
ト云フ

第八 大正二年勅令第二百六十二號任用分
限又ハ官等ノ初敘陞敘ノ規定ヲ適用セサ
ル文官ニ関スル件中改正ノ件

本案ハ左ノ三項ヲ包含ス

(一) 本令第一條ノ改正

本令第一條ハ所謂政務官ノ規定ニシテ
内閣書記官長外數官ヲ以テ文官任用令

ノ規定ニ拘ラズ任用スルコトヲ得ル
同時ニ文官分限令ノ規定ニ依ラズ免職
スルコトヲ得ルモノト爲シ且此等諸官
ノ官等ノ初叙及陞叙ニ付テハ高等官官
等俸級令第四條及第五條所定ノ制限ヲ
適用セサルコトヲ定ム本案ハ本條列舉
ノ諸官中ヨリ各省ノ參政官及副參政官
並鐵道院總裁ノ秘書ヲ削除シ且之ニ在
米ノ内閣書記官長、法制局長官及秘書官
ノ外新ニ拓殖局長官、各省次官、内務省警

保局長、各省參事官、警視總監、貴族院書記
官長及衆議院書記官長ヲ追加スルモノ
ナリ參政官外ニ官ヲ削除スルハ其ノ廢
止ノ結果ニシテ拓殖局長官外六官ヲ追
加スルハ或ハ所掌事務ノ性質ニ照シ或
ハ前米ノ實績ニ徵スルニ出ツト云フ各
省次官ヲ所謂政務官ノ列ニ加フルコト
ハ此ノ改正ニ於テ特ニ注目スヘキ一事
ニシテ前ニ各省官制通則中改正ノ件ニ
付敘説シタル所ニ照應シテ各位階下ノ

考慮ヲ請フ所ナリ各省參事官ヲ勅任
ルト奏任タルトヲ列タス總テ此ノ列ニ
加フルコトモ亦特ニ各位閣下ノ留意ヲ
仰ク所ナリ

(二) 本令第二條ノ改正

本令第二條ハ教官、技術官其ノ他特別ノ
學術、技藝ヲ要スル文官ニハ官等初級ノ
制限ヲ適用セサルコトヲ定ムルモノニ
シテ本案ハ新ニ學校長及勅任文官ヲ此
ノ班ニ加フルモノナリ是レ學校長一般

ノ勅任文官並勅任ノ外交官及領事官ハ
廣ク銓衡ニ依リ之ヲ任用スルコトヲ得
ルモノト為スノ結果ナリ

(三) 明治三十六年勅令第二百八十五號ノ

廢止

明治三十六年勅令第二百八十五號ハ初
級官等ノ制限ヲ受ケサル高等文官即チ
特別文官ヨリ他ノ高等文官ト為ル場合
ノ官等ニ關スル件ニシテ所謂官等階
ノ原則ニ從ヒ特別文官ヨリ他ノ高等文

官ト為ル場合ノ官等ハ高等官六等以下
トシ特別文官ノ在職年数満二年ニ對シ
テ一等ヲ陞叙スルコトヲ得ル旨ヲ定ム
然ルニ本案附則第二項ニ於テ此ノ勅令
ヲ廢止シ高等官官等俸給令第四條及第
五條ノ一般規定ニ依リ右ノ場合モ亦前
官ノ官等以下ニ叙シ前官官等在職二年
ヲ超エタルトキハ一等ヲ進ムルコトヲ
得ルモノトス是レ縱ニ特別文官ナリト
モ既ニ高キ官等ニ遷任ナリトシテ任叙

セラレタル者任用ノ條件ヲ具足シテ他
ノ高等文官ニ任命セラレル場合前官ノ
在職年数少キノ故ヲ以テ故テ其ノ官
等ヲ下クルノ理ナキニ依ルト云フ此ノ
改正ノ結果特別文官ヲ他ノ高等文官ニ
任用スル場合ニ於テ官等制限ノ拘束除
却セラレ前掲高等文官ノ任用規程ノ改
正ト相俟キテ銓衡ニ依リ高等文官ニ任
用スルコト從前ニ比シ更ニ自由ナルニ
至ル

第九 辯護士タル者ヲ判事、檢事ニ任用スル
場合ニ於ケル官等ニ関スル件

辯護士ヨリ判事、檢事ニ任スルコトヲ得ル
ノ制ハ判事、檢事カ辯護士ト為ルコトヲ得
ルノ定ト相俟キテ國家ノ裁判ニ參與スル
朝野ノ機関ニ相互ノ疏通ヲ良クシ以テ司
法事務ノ刷新改善ヲ企圖スル所以ニシテ
又實際常時司法官瀕貧ノ一部ハ之ヲ辯護
士ヨリ任用スルノ必要アリ即チ辯護士法
第四條ニ於テ判事、檢事タル資格ヲ有スル

者ニハ試験ヲ經スシテ辯護士タルコトヲ
得シムルト同時ニ裁判所構成法第六十五
條ニ於テ三年以上辯護士タル者ハ試験及
考試ヲ經スシテ判事、檢事ニ任セラルルコ
トヲ得ルモノトシ尚同法第六十九條及第
七十條ニ於テ五年以上辯護士ノ職ニ在リ
テ判事ニ任セラルル者ハ控訴院判事ニ、
十年以上辯護士ノ職ニ在リテ判事ニ任セ
ラレタル者ハ大審院判事ニ補セラルルコ
トヲ得ル旨ヲ定ム然ルニ高等官官等俸給

令第四條ニ初叙ノ官等ハ高等官六等以下
トスルノ制限アルカ為ニ多年辯護士ノ職
ニ在リ成績優秀ニシテ自ラ進テ司法官ト
ラムト欲スル者ヲ相當地位ノ司法官ニ任
用スルコト能ハス從テ前記裁判所構成法
ノ規定ヲ活用シテ其ノ期待スル趣旨ヲ發
揮シ且要員ヲ充足シテ刻下ノ需要ニ適應
スルコト困難ナルノ實況ナリ加之右ノ制
限ハ或ハ民間法曹ヲシテ徒ニ司法部ニ城
府ヲ設クルノ感ヲ抱カシメ惹テ官民ノ協

調ニ支障ヲ醸スノ虞ナシトセス此等ノ理
由ニ依リ本案ハ辯護士タル者ヲ判事檢事
ニ任用スル場合ニ對シ特ニ上記初叙官等
ノ制限ヲ寛和セムトスルモノニシテ其ノ
要旨ハ(一)辯護士タル者ヲ初メテ判事檢事
ニ任用スル場合ニ於ケル官等ハ辯護士在
職六年未滿ノ者ハ六等以下トシ其ノ六年
ニ達スル者ハ五等ニ進メ更ニ三年ヲ加フ
ル毎ニ一等ヲ進ムルコトヲ得(二)前ニ高等
文官タリ退官退職ノ後辯護士ト為リタル

者ヲ更ニ判事、檢事ニ任用スル場合ニ於テ
ル官等ハ前官ノ官等以下トシ前官官等在
職二年ヲ超ユル者ハ一等ヲ進メ前官ノ官
等七等以下ナル者ハ六等ニ陞スコトヲ得
ルノ外此ノ再任ノ場合ニ敘シ得ル官等ニ
對シ中途辯護士タリシ期間三年毎ニ一等
ヲ進ムルコトヲ得(三)親任判事即チ大審院
長ニハ本案ノ規定ヲ適用セズ高等官官等
俸給令第六條ニ從ヒ初敘官等ノ制限ニ依
ラス之ヲ任命スルコトヲ得(四)本案ノ規定

ハ辯護士タル者ヲ朝鮮、臺灣及關東州ノ司
法官ニ任用スル場合ノ官等ニ付之ヲ準用
スルノ諸點ニ在リ

上記各件ニ付委員會ニ於テ縝密討查ヲ遂ケ
タル結果其ノ原議ニ同意スヘシト認メタル
モノアリ之ニ同意スヘカラスト認メタルモ
ノアリ之ヨリ進テ委員會ニ於テ討議決定シ
タル結果ヲ以テ其ノ意見ノ存スル所ヲ説明
シ引續キ各位閣下ノ清聴ヲ煩サムト欲ス

第一 國勢院官制

惟フニ本案ノ骨子タル軍需及統計ノ二局
ヲ合一スルコト果シテ妥當ノ措置ナルカ
此ノ二局ハ其ノ事務多少関聯スル所ナキ
ニアラスト雖甲ハ一般統計ニ関スル事項
ヲ掌リ乙ハ專ラ軍需工業ニ関スル事務ヲ
掌リ其ノ間固ヨリ截然タル分界ヲ存シ強
テ之ヲ併合スヘキ必然ノ論據アルニ非ス
若シ軍需局ノ事務ハ統計ヲ基礎トスルカ
故ニ必ス之ヲ合併スヘシトセハ獨リ軍需
局ノミナラス凡ソ統計ヲ基礎トスル行政

事務ヲ管掌スル部局ハ舉テ之ヲ統計局ニ
合一スルコト當然ナリト為スノ結論ニ到
著スヘシ又輒近各般ノ研究施設ニ於テ其
ノ合理的基礎タルヘキ確實ナル統計ヲ要
求スルコト益緊切ヲ加フルカ故ニ方今統
計ノ事務ハ其ノ發展充實ヲ企圖セザルヘ
カラザルニ拘ラヌ本案ニ於テハ何等斯ノ
如キ趣旨ヲ包含シタル跡ナキノミナラス
却テ二局合併ノ結果統計部職負ノ力ヲ割
キテ軍需部ノ事務ニ當ラシメ為ニ統計部

ノ事務ハ從前ニ比シ一層ノ減少ヲ受クル
カ如キ事態ヲ生スルコトナキヲ保セス統
計局ヨリ見レハ所謂廂ヲ貸シテ母家ヲ取
テルルノ感アリ且軍需局ノ現制カ平時ノ
施設トシテ稍穩當ナラサルノ嫌アルハ本
官等亦同感ナルモ之カ適當ナル更革ニ付
テハ必スシモ他ニ何等カノ方策ナキニア
ラサルヘシ此等ノ見地ヨリ見レハ敢テ二
局ヲ合一スルコトナク統計局ハ獨立シテ
其ノ擴張完備ヲ規畫シ軍需局ハ別ニ其ノ

整理按排ヲ考案スルコト最上ノ處置ナル
カ如シ然レトモ本官等ハ内閣ニ於テ此ノ
議ニ從フコトヲ強テ難シトスルノ事情アリ
ルヲ諒察シ將來ノ國防ト平時ニ於ケル軍
需局ノ體裁トヲ斟酌シ大躰本案ノ趣旨ヲ
容レテ前記二局ノ併合ニ同意スルコト亦
己ムヲ得サルノ舉措ナリト認ム唯此ノ場
合ニ於テハ國勢院ト云フ名稱ノ示スカ如
ク同院ハ統計事務カ具ノ本躰ニシテ軍需
事務ハ其ノ從屬ニ過キサルノ旨意ヲ確立

レ部局ノ構成職負ノ定負等ニ於テ名實共
ニ此ノ旨意ニ合致スルノ措置ヲ執リ統計
部ノ職負ニ付此ノ際相當ノ増負ヲ行ヒ且
統計事業ノ擴張ニ對シ速ニ所要經費ヲ増
額スルノ途ニ出ツルコト當然ナリ此ノ趣
旨ヲ以テ當局ノ意嚮ヲ質シタルニ當局モ
亦主義ニ於テハ全然之ニ同意ヲ表スルモ
其ノ中統計部職負ノ増加及同經費ノ増額
ハ急速ニ之ヲ實行スルコト困難ナルノ事
情アルカ故ニ假スニ若干ノ日子ヲ以テス

ルニ於テハ本官等ノ要望ヲ實現スルニ最
善ノ努力ヲ致スヘキ旨ノ言明ヲ得タリ仍
テ委負會ニ於テハ本案ノ大躰ニ同意スル
モ右交渉ノ趣旨ニ從ヒ且別ニ考フル所ア
リ其ノ條項ニ三四ノ修正ヲ加フルコト可
ナリト認メタリ其ノ修正ノ條項及理由左
ノ如シ

(一) 第一條ノ修正

本條中第一號及第二號ト第三號乃至第
七號トヲ前後轉置スルハ一ニ前記統計

事務ヲ主トシ軍需事務ヲ従トスルノ旨ヲ昭明ニスルモナリ

修正案第四號中ニ統計職員ノ養成ニ関

スル事務ヲ加フルハ今後統計事務ノ實

績ヲ舉グル為其ノ優良職員ヲ養成スヘ

キ方法ヲ講究實施スルノ必要アルニ由

ル又修正案第七號ヲ加ヘテ軍需工業復

負ニ関スル調査事務ヲ掲グルハ平和克

復ノ後復負ノ問題ハ極メテ重要ノ事項

ナルノミナラス平時ノ制度ニ於テ之ニ

関スル規定ヲ存スルコト最モ事宜ニ適

スル所以ナルニ由ル

(二) 第三條ノ修正

第一部及第二部ノ所掌事務ニ関スル引

照條項ヲ變更スルハ第一條ノ號ヲ轉置

スルノ修正ニ伴ヒ之ト同一ノ趣旨ニ出

ツルモノナリ

(三) 第四條ノ修正

原案ニ於テハ現行軍需局官制第三條及

第九條ヲ踏襲シテ軍需部ノ事務ニ參與

セレムル為參與ヲ置クコトヲ定ム然レ
トモ參與ノ制ハ必スシモ之ヲ一部ノ事
務ニ限ルノ理由ナク寧ロ廣ク之ヲ全般
ノ事務ニ及ホスコト妥當ナリ加之大正
五年勅令第百一號ニ依レハ統計局ニ願
向ヲ置クノ制アリ願向ト參與トハ其ノ
實稍同シキモノナルカ故ニ之ヲ合シテ
參與ト為スコト蓋シ規程ノ躰ヲ整フル
所以ナリ是レ第四條第一項ニ修正ヲ加
フル理由ナリ

原案ニ於テハ現行官制第五條ニ陸海軍
次官ヲ以テ軍需次官ニ充ツルノ規定ア
ルヲ參酌シ特ニ陸海軍次官ヲ以テ參與
ト為スコトヲ掲ケ且其ノ他ノ參與ハ現
行官制第九條ト同シク関係各廳勅任官
ノ中ヨリ之ヲ命スルコトヲ定ム然ルニ
廣ク參與任命ノ定アルニ照シ特ニ陸海
軍次官ヲ以テ當然之ニ充ツルコトヲ掲
クルハ殆ト其ノ必要ナキ所為ナルニ
ナラス惹テ常ニ陸海軍次官ニ對シテ特

ニ重キヲ置キ一層優越ナル地位ヲ與フ
ルノ觀アルハ決シテ允當ノ處置ニ非ス
唯陸軍海軍農商務逓信ノ如キ密接ノ交
渉アル官署ヲ列記シ其ノ他關係各廳ノ
勅任官中ヨリ適任ヲ簡選シテ參與ヲ命
ジ各負相並ヒテ其ノ班ニ列スルモノト
為スコト可ナリ又參與ハ獨リ各廳勅任
官ニ限ラズ廣ク學識經驗アル者ヨリ之
ヲ取ルコト當然ニシテ殊ニ參與ヲシテ
各部ノ事務ニ関與セシムルニ於テ其ノ

然ルヲ感ス而シテ參與ニ付テハ特ニ其
ノ待遇ヲ明ニシ本官ヲ有スル者ハ其ノ
本官ノ待遇ニ依リ本官ヲ有セサル者ハ
勅任官ノ待遇トスル旨ヲ定ムルコト妥
當ナリ是レ第四條第二項ヲ削除シ第三
項ヲ修正シ第四項ヲ追加スル所以ナリ
第二 鐵道省官制及鐵道局官制施行ノ際ニ
於ケル鐵道省及鐵道局職員ノ任用等ニ関
スル件

本案ハ大體ニ於テ支障ナシ唯第二條ニ於

ニ鐵道局官制施行ノ際現ニ鐵道管理局長
タル鐵道院理事ハ當然鐵道局長ニ任セラ
レタルモノトスル趣旨ヲ規定シ尚本件立
案ノ當時右ニ該當スル者ノ中其ノ現有ノ
官等及俸給カ所定ノ鐵道局長ノ官等及俸
給ヲ超ユルモノアリシカ故ニ其ノ者ハ特
ニ其ノ在官中ニ限リ仍從前ノ官等及俸給
ヲ保有スルコトヲ併セ規定スルモ爾後事
態ニ變更ヲ來シ今ヤ右特例ノ場合ニ該當
スルモノナキニ至リシヲ以テ此ノ事實ニ

照シ該特例ノ條項ヲ掲クルノ必要ナシ即
チ本條但書ヲ削除スルコト當然ナリ

第三 各省官制通則中改正ノ件

本案改正ノ諸點ハ次官ノ制ニ関スルモノ
ヲ除クノ外異議ナシ抑次官ノ制ニ付テハ
從來幾多ノ沿革アリ要スルニ國政ノ機務
ニ參與シテ内閣ノ交迭ト共ニ進退スヘキ
政務次官ヲ置クハ支障ナキモ一般ノ省務
ヲ統轄シテ繼續的ニ事務ノ中心ト為ルヘ
キ事務次官ヲ存置セサルヘカラサルコト

本院年來ノ見解ニシテ實ニ國務遂行ノ要
訣ナリト認ム現行規程ニ於テ次官參政官
ヲ併置スルハ畢竟此ノ趣旨ヲ裁酌スルニ
出ツ今回本案ニ於テ參政官ヲ廢止スルハ
必スシモ不可ナラストスルモ大正二年勅
令第二百六十二號中改正ノ件ト相俟キテ
次官ハ大臣ト共ニ進退スヘキモノト爲シ
各省ニ於ケル事務ノ永續的中心ヲ廢止ス
ルハ本官等ノ容易ニ贊成スルコト能ハサ
ル所ナリトス即チ本官等ハ原案ノ趣旨ヲ

採酌シ政務次官事務次官併置ノ趣旨ヲ以
テ頻リニ當局ノ考慮ヲ求メタルモ内閣ニ
於テハ各省事務ノ繼續的統轄ハ必スシモ
之ヲ次官ニ求ムルコトヲ要セス今日ニ於
テハ局長之ニ當ルヘキ旨ヲ陳述シテ熱心
ニ原案ノ成立ヲ希望セリ即チ本官等ハ理
論上到底容認シ難キ所ナルモ當局苦衷ノ
存スル所ト刻下政情ノ趨勢トヲ諒察シ互
譲ノ精神ヲ以テ姑ク原案ノ次官制ニ同意
ヲ表シタル次第ナリ

尚大正三年勅令第二百七號各省官制通則
中改正ノ件附則但書ニ參政官及副參政官
ヲ置クハ各省經費支辨ノ都合ニ依ルコト
ヲ得ル旨ノ規定アリ此ノ規定ハ今回參政
官及副參政官ヲ廢止スルノ結果全然不用
ト為ルカ故ニ明ニ之ヲ削除スルコト條項
ヲ整理スルノ趣旨ニ合ス是レ本案附則ニ
一項ヲ追加スル所以ナリ
第四 文官任用令中改正ノ件
本案ヲ以テ判任文官ノ任用條件ヲ輕減ス

ルニハ別ニ異議ナシ又廣ク學校長ヲ銓衡
任用ノ官ト為スハ趣旨ニ於テ必スシモ不
可ナラスト雖其ノ性質寧ロ事務官ニ屬ス
ルニ考ヘ從前ノ如ク普通任用ノ制ヲ存シ
傍ラ銓衡任用ノ途アルモト為スコト更
ニ妥當ノ措置ナリト認ム是レ第七條ニ修
正ヲ加フル所以ナリ
本案ニ於テ勅任文官ノ任用範圍ヲ著シク
擴大スルハ蓋シ今回文官任用令改正提案
ノ眼目ニシテ又實ニ本官等ノ最モ潛思熟

慮ニタル所ナリトス其ノ第一點タル本令
第三條但書ヲ削除シ大正二年勅令第二百
六十二號第一條ニ掲クル自由任用ノ所謂
政務官モ亦右第三條ノ規定ニ依リ教官技
術官等ト均シク銓衡ヲ經テ之ヲ一般勅任
文官ニ任用スルコトヲ得ルモノト為スハ
所謂政務官ニ限り其ノ特殊ノ事情ヲ斟酌
シテ自由任用ノ官ト其ノ他ノ官トノ分界
ヲ紛更スルモノニシテ又實ニ本院ノ先議
ニ牴觸スル所アリト雖當局ニ於テ刺下ノ

制ヲ定テタル趣旨ヲ無視シ自由任用ノ

政情ニ付縷々陳述スル所アリ其ノ切ナル
希望ニ基キ特ニ讓歩シテ原案ニ同意スル
コト已ムヲ得サルノ舉ナリト認ム唯後ニ
記述スル所ノ如ク明治三十六年勅令第二
百八十五號初級官等ノ制限ヲ受ケサル高
等文官他ノ高等文官ト為ル場合ノ官等ニ
関スル件ヲ存置スルノ結果此ノ改正ニ依
リ所謂政務官カ一般勅任文官ニ任用セラ
ルル場合ニ於テモ諒勅令所定ノ年數ヲ經
過セサルヘカラサルコト本官等ノ固ク執

リテ動カサル所ナリトス

勅任文官ノ任用範圍ヲ擴張スルノ第二點

タル本令第三條ノ二ノ新設ニ至リテハ當

局ノ熱心力説ヲ極メタル所ナリ按スルニ

相當ノ官歴アル者銓衡ヲ經テ勅任文官ニ

陞任セラルルノ制ハ既ニ第三條ニ掲クル

所ナリ故ニ新ニ本條ヲ以テ定ムトスル

所ハ單ニ民間ノ遺材ヲ銓衡ニ依リ一躍勅

任文官ニ登用スルノ途ヲ開カムトスルニ

在リ而シテ斯ノ如キ任用制度ヲ各省局長

其ノ他一般ノ勅任文官ニ適用シ僅ニ十種

ノ官ノミヲ除外スルニ過キス是レ本官等

潛考熟慮ノ末断シテ參同シ能ハサル所

リ茲ニ其ノ理由ヲ申述ヘムニ(一)當局ハ本

案ニ於テモ従前ノ通り第二條ニ定ムル試

驗任用カ本則ニシテ銓衡任用ハ變則ナリ

ト云フト雖第三條ノ二ニ依レハ一般ノ勅

任文官ハ特定少数ノモノヲ除クノ外然テ

銓衡任用ヲ許スモノニシテ殊ニ將來設置

セラルヘキ勅任文官ハ其ノ職司如何ニ拘

附
密
陽

ラ本條ノ規定ニ依リ悉ク皆當然銓衡任用ノ官ニ列セラルルニ至ルヘシ如ク多数一般ノ勅任文官ニ付銓衡任用ノ途ヲ開クニ於テハ試験任用ノ制ハ畢竟少数例外ノ官ノ為存續セラルルニ過キサルノ結果ヲ生ス是レ實ニ原則例外ヲ轉倒スルモノニシテ文官任用試験ノ趣旨ヲ没却シ其ノ制度ヲ破壊スルモノト謂ハサルヘカラス(二)本條所定ノ一般勅任文官ニ對スル任用條件ハ學識經驗アルコト及高等試験委

員ノ銓衡ヲ經ルコトノ二點ニ外ナラス凡ソ如何ナル場合ニ於テモ相當ノ學識經驗ナキ者ヲ官吏ニ擧用スルコトアラムヤ單ニ相當ノ學識經驗ヲ有スル者ト謂フカ如キ空疎ノ條件ハ實ニ特ニ掲ケテ以テ任用ノ資格ト為スニ足ラサルコト言フ俟タス又銓衡任用ノ制ハ固ヨリ今日ノ創始ニ非スト雖從前ノ例ニ依レハ其ノ適用ノ範圍及銓衡ノ條件明確ニ局限セラルルカ故ニ銓衡ノ標準モ亦自ラ確然據ルヘキモノナ

キニアラス今漠然之カ範圍ヲ擴メテ一般ノ勅任文官ニ及ホシ且其ノ銓衡ノ條件ヲ特ニ限定セサルニ於テ實際ノ運用果シテ宜シキヲ得ヘキヤ否ヤ惟フニ銓衡ノ標準到底的確ヲ期シ難キハ繁説ヲ待タサル所ナリ若シ其ノ標準ノ的確ヲ期スルカ為ニ規程ノ嚴正ニ涉ルモノアラムカ特例タル銓衡ヲ通過スルコト却テ本則ノ試験ニ合格スルヨリモ更ニ至難ナル結果ヲ生スルニ至ラムコトヲ虞ル若シ其ノ標準疎漫ニ

流レムカ銓衡ハ一片ノ虚儀ニ属シ名ハ銓衡任用ト云フモ實ハ自由任用ニ異ナラサルノ變態ヲ来スニ了ラムノミ即チ本條ノ規定ハ其ノ實用宜シキヲ制スルニ於テ多大ノ困難アルコトト知スヘキナリ(三)更ニ本條實施ノ影響ヲ覆ムルニ單ニ學識經驗アリ且銓衡ヲ經ルノ條件ヲ以テ一般勅任文官ニ任用セララルコトヲ得ルカ故ニ往年其ノ流弊ニ堪ヘサリシカ如キ獵官ノ運動ヲ一部人士ノ間ニ惹起セムコト容易ニ

逆睹スヘク其ノ結果若シ不幸ニシテ當局
其ノ人ヲ得サルコトアラハ必スヤ情實ヲ
以テ官吏ノ舉否ヲ決スルカ如キ弊害ヲ釀
スヘキナリ又此ノ任用ノ途ニ依リテ舉ケ
ラレタル者ハ理論上其ノ不限ニ関シ法定
ノ保障ヲ受ケサルニ非スト雖上司ノ簡選
ニ由リ登用セラレタルモノナルカ故ニ實
際上其ノ進退ハ上司ト共ニスルノ情勢ア
ルノミナラス本案ハ時々民間新鮮ノ空氣
ヲ官場ニ注入スルヲ以テ眼目トスルモノ

ナリト謂フヲ以テ内閣ノ更迭ニ伴ヒ多数
ノ勅任文官ニ異動ヲ生スルコト本條ノ固
ヨリ期待セサルヲ得サル所ニシテ斯ノ如
キハ次官ヲ自由任用ト為スノ理由トシテ
各省ノ事務ハ局長ニ於テ繼續的ニ統轄ス
ヘシト内閣ノ説明ニ直接矛盾スルノミ
ナラス實ニ行政機關ヲ攪亂スルモノナリ
ト言ハサルヘカラス又斯ノ如ク裏門ヨリ
入りテ一舉ニ高官ヲ博スル者漸ク多キニ
上ラムカ正々堂々表門ヨリ進入シタル優

秀ノ者ハ皆民間ニ入り當初ヨリ官界ニ来
リ一意國務ヲ奉シ官等階ノ秩序ヲ踏
身ヲ立テムトスル者ナキニ至ルノミナラ
ス右ノ如キ希望ヲ以テ現ニ官場ニ在ルノ
輩モ望ヲ前途ニ失ヒ業ヲ民間ニ轉スルニ
至ルヘト近時優秀ノ青年多ク好ムテ民業
ニ就キ又官場有為ノ士ニシテ自ヲ求メテ
民間ニ轉職スルモノ少カラスト聞ク惟フ
ニ此ノ事實ハ本條實施ノ曉必スヤ從前ニ
倍蓰スルモノアラム凡ソ此等ノ情形ハ誠

ニ國家カ練達堪能ノ文官ヲ養成シテ行政
ノ強固確實ヲ期スルノ主意ヲ破壞セムト
スルモノナリ(四)元來官吏ハ民業ノ從事員
ト異ナリ國家ノ公務ニ任シ其ノ重責ニ膺
ルモノナリ此ノ地位ニ照シ儼然タル所定
ノ資格ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ任用セ
サルコト實ニ國法上ノ本義ニシテ試験制
度ヲ以テ官吏任用ノ原則ト為スノ理據ハ
畢竟此ニ胚胎ス尤モ造材ヲ造所ニ置クノ
自由ハ試験制度ノ為ニ多ク制限ヲ受クル

コトアルハ勿論ナリト雖是レ總テノ制度ニ避クヘカラサル結果ニシテ之カ爲此ノ試験制度ヲ排斥スヘキニ非サルヤ又明ナリ大凡立憲法治ノ制ハ國家大局ノ利益ヲ顧念シテ法令ノ拘束ヲ設定スルニ在リ稀有ノ場合ニ於ケル此ノ拘束ノ不便ヲ云爲シテ法制ヲ撤廢スヘカラサルハ論ナキ所ナリ其ノ他尙試験制度ニハ當局辯スル所ノ如キ多少ノ不利ナキニアラスト雖畢竟他ニ之ニ代ハルヘキ良法ナキカ故ニ之ニ

從フノ外ナキナリ而シテ其ノ試験任用ノ窮屈ナルノ弊害ニ至リテハ要所ニ自由任用ノ官ヲ置クカ如キ其ノ他適宜ノ施爲ニ依リ之カ疏通ノ方法アリ深ク憂フルニ足ラサルナリ(五)又近時民業ニ轉スル者アルニ因リテ生スル官界ノ剝蝕ヲ補充スルカ爲民間ヨリ任用ノ途ヲ開クノ要アリト云フト雖右ノ轉職ハ主トシテ給與ニ於テ官民間ノ懸隔甚大ナルニ基因スルモノナルヲ以テ右ノ缺陷ノ填補ハ官吏待遇ノ改善

ニ依リ其ノ目的ヲ達スヘキモノニシテ
條改正案ノ如キモノヲ採用スルトキハ却
テ缺陷ヲ深大ナラシムヘキコト前ニ縷述
シタル所ノ如シ以上五款ノ理由ニ依リ本
官等ハ到底本條ノ趣旨ニ賛同スルコト能
ハザルナリ尤モ試験任用ノ制ヲ常経トス
ルモ傍ラ範圍ヲ限定シテ銓衡任用ノ制ヲ
立テ以テ多少ノ變通ヲ許スハ固ヨリ其ノ
所ニシテ現行規程ニ於テモ亦之ヲ認ム茲
ニ於テ本官等ハ一面當局ノ熱望ニ考ヘ他

面軌近ノ政情ニ照シ新ニ特殊ノ官ニ限リ
單ニ學識經驗了ル者ヨリ銓衡ヲ經テ任用
スルノ途ヲ開クコト萬已ムヲ得サルノ措
置ナリトス此ノ主義ニ從ヒ先ツ特ニ掲ク
ル諸官ニ限リ例外トシテ銓衡任用ヲ許ス
ノ旨意ヲ昭明シ尋テ作業官廳ノ職員及ニ
三特殊ノ職司アル官合セテ十四種ヲ列舉
スルニ止ムルコト妥當ナリト認ム是レ本
條ヲ修正可決スル所以ナリ

第五 外交官領事官及書記生任用令中改正

ノ件

勅任ノ外交官及領事官ハ其ノ職司特殊ノ事務ニ属スルモノアルカ故ニ一般ノ勅任文官ニ付テハ銓衡任用ノ途ヲ認ムヘカラスト為スモ同官ニ付テハ特ニ其ノ制ヲ立ツルコト必スシモ理據ナキニアラヌ唯原案單ニ學識經驗アル者ヨリ之ヲ任用スルコトヲ得ト云フハ其ノ本務ニ須要ナル素養アル者ニ限り此ノ制ニ依リテ任用スルノ趣旨ヲ表明スルニ的確ナラサルノ嫌アリ

第六 奏任文官特別任用令

判任文官トシテ一定ノ経歴アル者ハ其ノ前米後事シタル職務ノ種別ヲ問ハス数多ノ奏任文官ニ通シテ銓衡ニ依リ任用スルコトヲ得ルモノト為スハ奏任文官特別任

用ノ規程ニ関スル従前ノ方針ヲ一變スル
モノナリト雖俊秀ヲ登用シ其ノ進路ヲ開
通スルノ趣旨ニ於テ必スシモ可ナラスト
セス然レトモ原案奏任文官ハ原則トシテ
銓衡任用ヲ許シ本令ニ列擧スル十數官ノ
ニ例外トシテ普通任用ニ限ルノ體制ハ正
ニ冠履轉倒ノ譏ヲ免レサル所ナルノミナ
ラズ其ノ結果將來設置セラルル官ハ特ニ
之ヲ本令ニ追記セサル限り當然銓衡任用
ノ列ニ加ハラルルカ如キ到底允當ノ立案

ト為スヘカラス即チ在來ノ特別任用規程
ヲ裁酌シ所掌事務ノ性質ヲ勘考シテ銓衡
任用ヲ許スヘキ諸官ヲ本令ニ明掲スルコ
ト當然ノ措置ナリト認ム此ノ見地ニ於テ
本案ニ形式上全部ノ修正ヲ加フルノ止ム
トキニ至レリ
本令ニ依リ銓衡任用ヲ許ス範圍ハ修正案
ノ規定スル所原案ニ比シテ狭少ナリ是レ
修正案ニ於テハ現ニ特別任用ノ規定アル
諸官ノミヲ列擧シ其ノ他ノ諸官ハ今後必

要ニ應ヒテ隨時之ヲ追加スハキモノトモ
スニ由ル

第七 大正二年勅令第二百六十二號任用分
限又ハ官等ノ初叙陞叙ノ規定ヲ適用セサ
ル文官ニ関スル件中改正ノ件

(一) 第一條ノ修正

本令第一條ニ掲グル所謂政務官ノ列ニ
拓殖局長官、内務省警保局長、警視總監及
貴衆兩院書記官長ヲ追加スルコトニ付
テハ當局説明ノ趣旨ヲ諒シテ必スシモ

反對セズ各省次官ニ付テハ前ニ各省官
制通則中改正ノ件ニ於テ敘説シタルカ
如ク本官等ハ次官ヲ政務官ト為スニ於
テハ別ニ事務次官ヲ併置スルコト至當
ナリト認ムルモ特ニ讓歩シテ原案ヲ承
認スルノ外ナキニ至レリ唯各省參事官
ハ官制上何レモ上司ノ命ヲ承ケテ審議
立案ヲ掌ルモノナルモ其ノ中勅任ノ參
事官ハ實際ニ於テ大臣ニ接近シテ機務
ニ參畫スルコトアルカ故ニ之ヲ政務官

ト為スノ理由ナキニアラスト雖奏任ノ
参事官ニ至リテハ之ト事情ヲ異ニシ普
通省務ノ一部ニ鞅掌スルニ過キサルモ
ノナルニ考ヘ之ヲ政務官ト為スハ何
等ノ根據ヲ見出スコト能ハス即チ勅任
ノ各省参事官ニ限り之ヲ政務官トシテ
本條ノ列記ニ加フヘキモノト認ム

(二) 第二條ノ修正

本條ニ掲クル官等初叙ノ制限ヲ適用セ
サル高等文官ノ中ニ學校長ヲ追加スル

コトニハ異議ナシ然レトモ文官任用令
中改正ノ件ニ於テ第三條ノ二ヲ修正シ
特殊ノ勅任文官ニ限り銓衡任用ノ制ヲ
認ムルノ結果本條ニ概シテ勅任文官ト
掲クルハ蓋シ廣汎ニ失スルモノトス即
チ右條項ト外交官領事官及書記生任用
令第七條ノ勅任ノ外交官及領事官ニ對
スル銓衡任用ノ規定トニ照應スルノ趣
旨ヲ以テ原案單ニ勅任文官ト云フヲ修
正シテ文官任用令第三條ノ二ニ掲クル

勅任文官勅任外交官及勅任領事官ト云
スコト妥當ナリトス又聊カ字句ノ整理
ヲ要スル點アリ是レ本條ノ修正アル所
以ナリ

(三) 附則第二項ノ削除

特別文官ニ官等初叙ノ制限ヲ適用セサ
ルハ其ノ官特殊ノ事情ニ因由ス然ルニ
特別文官ヨリ他ノ高等文官ト為ルニ當
リ特別文官トシテ享ケタル特典ヲ廢用
シテ其ノ官等ト同等以上ニ叙セラレ得

ルモノト為スハ濫リニ特例ノ範圍ヲ推
擴スルノ措置ニシテ所謂官等階ノ原
則ニ背戾シ初メヨリ普通ノ高等文官ニ
在リテ所定ノ年數ヲ累テ陞進スル者ト
ノ間ニ權衡ヲ失スルノ譏ヲ免レス是レ
附則第二項ヲ削除シテ明治三十六年勅
令第二百八十五號ヲ存置スル所以ナリ
第八 辯護士タル者ヲ判事檢事ニ任用スル
場合ニ於ケル官等ニ関スル件
辯護士ヲ判事又ハ檢事ニ任用スル場合ニ

於テ官等初叙ノ制限ニ関スル一般規定ヲ
適用セサルノ制ハ曩ニ大正二年六月及大
正三年十二月御諮詢アリタルモ遂ニ本院
ノ可決ヲ經ルニ至ラサリシモノナリ而シ
テ今回更ニ御諮詢ヲ蒙リタルハ實ニ第三
回ノ御諮詢ナルカ故ニ本官等ハ特ニ深慮
ヲ重ネタル結果即今ノ情勢ニ照シテ當局
辯明ノ諸點必スシモ理由ナキモノニアリ
サルコトヲ認ムルト同時ニ運用其ノ宜シ
キヲ得ルニ於テハ必スシモ弊竇ヲ防遏ス

ルコト不可能ナルニ非スト認メ強テ前議
ヲ固執セス趣旨ニ於テ本案ニ同意スルコ
ト亦已ムヲ得サルノ措置ナリト然レト
モ二三ノ條項ニ互リテ修正ヲ必要トスル
モノアリ

(一) 第一條及第二條第一項ノ修正

多年辯護士タリシノ故ヲ以テ官等初叙
ノ特例ヲ開クニ當リ單純ニ辯護士ノ在
職年數ヲ以テ其ノ基本ト為ス旨ヲ掲ク
ルニ止マルトキハ辯護士名簿ニ登録セ

ラレルモ其ノ實務ニ従事セサルモノ
モ包含スルカ如ク解セラルルノ嫌ナ
ニアラス即チ字句ヲ改竄シテ該特例適
用ノ根底タル辯護士ノ在職年数ハ其ノ
實務ニ従事スル年数ニ依リ之ヲ算スル
ノ義ヲ明ニスルコト可ナリ是レ標記ノ
條項ヲ修正スル理由ナリ

(二) 第二條第四項ノ追加

原案ニ於テハ明治三十六年勅令第二百
八十五號初叙官等ノ制限ヲ受ケサル高

等文官他ノ高等文官ト為ル場合ノ官等
ニ關スル件ヲ廢止スルノ前提ノ下ニ右
勅令ニ所謂特別文官タリト者退官後辯
護士ト為リ更ニ判事又ハ檢事ニ任用セ
ラルル場合ノ特別規定ヲ存セス然ルニ
前ニ敘述シタルカ如ク前記勅令ヲ廢止
セサルノ結果同令ノ精神ニ循由シ特別
文官タリト者辯護士ノ在職ヲ經テ判事
又ハ檢事ニ任用セラルル場合ノ官等ニ
關スル特別規定ヲ設クルノ必要アルコ

ト大正三年ノ案ニ同様ノ規定アリシニ
徴スルモ明白ナリ是レ標記ノ條項ヲ追
加スル所以ナリ

(三) 新第三條ノ追加

本案ノ勅令ニ依リ高キ官等ニ敘セラレ
タル判事又ハ檢事ハ明治三十六年勅令
第二百八十五號ニ所謂特別文官ナルモ
其ノ判事又ハ檢事ニ轉任又ハ再任スル
場合ニハ右勅令ヲ適用セス從前ノ官等
ヲ保有セシムヘキコト當然ナリ原案ニ

此ノ義ヲ示ササルハ同令ヲ廢止スルノ
前提アルニ依ル即チ右勅令ヲ存置スル
ノ結果前記ノ場合ニ於テハ之ヲ適用セ
サル旨ヲ昭明スルノ必要アルコト亦大
正三年ノ案ニ同様ノ規定アリシニ照ス
モ明瞭ナリ是レ標記ノ條項ヲ追加スル
所以ナリ

以上國務院官制外七件ニ関スル修正事項ニ
付屢次政府當局ト交渉ヲ累ネタル末當局ニ
於テハ右修正ニ對シ大體賛同ヲ表スルモ獨

リ文官ノ任用等ニ関スル規定中勅任文官ノ
銓衡任用及奏任參事官ノ自由任用ノ二點ニ
付テノ委員會修正案ハ當局提案ノ素旨ニ悖
ルモノアルヲ以テ遺憾ナカラ同意ヲ表シ難
キ所ナリ然リト雖先般米雙方ノ間ニ屢次交
渉ヲ累テ慎重凝議ヲ盡シタル經過ニ願ミ此
ノ際敢テ前議ヲ固執セサルヘシトノ答辯ヲ
得茲ニ始メテ政府當局ト協調ノ實ヲ舉クル
コトヲ得タリ自餘ノ一件即チ鐵道省官制ハ
本官等ニ於テモ別ニ異議ナキ所ナリトス

終ニ茲ニ本官等希望條件トシテ當局ノ考慮
ヲ求ムヘキ事項アリ(一)今回各省官制通則改
正ノ結果各省ヲ通シテ其ノ官制ノ定ムル所
ニ依リ大臣官房ノ事務ノ一部ヲ處理セシム
ル為持ニ局ヲ設ケ得ルコトト為リ且各省參
事官及書記官ノ定員ハ各省官制ニ於テ適宜
之ヲ定メ得ルコトト為リ茲ニ各省官制ノ規
定ノ範圍擴大シタルニ考ヘ今後各省官制ノ
改正案ハ今回ノ鐵道省官制ト同シク本院ニ
御諮詢アラムコトヲ奏請セラレムコトヲ希

望ス(二)陸軍省官制附表及海軍省官制別表
於テ大臣及次官ヲ各陸海軍武官ニ限ル旨
定メタルハ明ニ文官ノ任用ニ関スル別段ノ
勅令規定ナルノミナラス其ノ次官ニ関スル
モノハ實ニ今回ノ次官任用ノ改正規定ニ對
スル特則ヲ為スモノナルコトハ當局ノ言明
スル所ナルカ故ニ若シ將來之ニ関スル變更
ヲ企ツルコトアラハ其ノ案ハ亦本院ニ御諮
詢アラムコトヲ奏請セラレムコトヲ希望ス
以上二點ノ希望事項ニ付當局ノ所見ヲ訊シ

タルニ當局ニ於テハ之ニ對シ大體異存ナク
希望ノ第一點タル各省官制改正案中局ノ設
置廢止參事官及書記官定員ノ増減其ノ他重
要ト認ムルキ事項ニ関スル規定ノ變更ニ係
ルモノ並希望ノ第二點タル案件ハ今後御諮
詢ヲ奏請スヘキ旨ノ答辯ヲ得タリ
審査委員會ニ於テハ國務院官制外七件ハ上
叙ノ修正ヲ加ヘ鐵道省官制ハ原案ノ儘可決
スヘキ旨前記ノ希望事項ト共ニ全會一致ヲ
以テ議決シタリ

右審査ノ結果ヲ報告ス

五番(原)

此ノ場合ニ於テ政府ノ所見ヲ一言シ

タ之最早大分ノ時ヲ費シタルニ付長ク辯ス

ル積ナシ唯簡單ニ一言セム

今回ノ改正案即チ國勢院官制其ノ他ノ案件

ニ付殆ト一ノ年ノ日子ヲ費シテ審査セラレ

タルコト深ク其ノ勞ヲ謝スル次第ナリ中ニ

就キ不幸ニシテ往々委員諸君ト所見ヲ異ニ

スルモノアルモ既ニ十分質問應答ヲ重ネタ

ル所ニシテ大體同意ヲ表シ差支ナシト考フ

唯文官任用令改正案ノ中勅任文官銓衡任用

ニ関スル修正ノミハ遺憾ナカラ同意ヲ表シ

難キ所ナリ元來今回政府ニ於テ此ノ改正案

ヲ計畫シタルハ現内閣ノ便宜ヲ計ルト云フ

カ如キ私心ニ出ツルニ非サルコト各位御承

知ノ通りニシテ畢竟今日ノ時勢ニ照ラシ斯

ノ如キ改正ヲ必要トスルニ由ルナリ鐵道省

官制國勢院官制ノ如キハ大局ヨリ見レハ行

政事務ノ整理ニ外ナラス其ノ修正ハ固ヨリ

差支ナシ然レトモ文官任用令ノ改正ニ付テ

ハ篤ト各位閣下ノ御考慮ヲ請ハムト欲ス所
年歐洲戦争ノ結果國民ニ種々ノ變化ヲ興
タル中ニ思想界ニモ著シキ變化ヲ来シタリ
此ノ變化ヲ見テ直ニ之ニ雷同スルハ不可ナ
リ乍併既ニ顯著ナル變化アル以上之ニ順應
シテ從來ノ制度ヲ改正シ以テ人心ノ寛和ヲ
企圖スルコト必要ナリ茲ニ於テ切ニ文官任
用令改正ノ必要アリト感シタリ行政各部ノ
機関ノミヲ主トシテ考フレハ試験ニ依リテ
採用シ成ルハク事務ノ練達ヲ計ルコト當然

ナルモ此ノ考ノミニテハ今日ノ時勢ニ適應
スルコト困難ナリ茲ニ於テ銓衡ニ依リ人ヲ
用ヒムト欲スルナリ而シテ始メ或ハ總テノ
勅任文官ニ銓衡任用ヲ及ホス位ノ改正カ必
要ナルヘシト考ヘタリ抑當初諸般ノ制度ヲ
創定シタル明治十八年ニハ總テノ勅任文官
カ自由任用ナリシテ其ノ後明治三十年頃
ノ改正ニ依リ現行ノ如ク爲リシモノニシテ
今回總テノ勅任文官ヲ自由任用ニ引戻ササ
ルマテモセメテ銓衡ニ依リ任用スルモノト

為スコトハ或ハ相當ナラムカト考ヘタリ乍
併今日急激ノ變化ハ宜シカラズ漸ヲ以テ進
ムコト秩序ヲ破ラズ當然ノ措置ナリト考ヘ
中央ノ勅任文官ヲ銓衡任用トシ地方ノ勅任
文官ハ現行ノ儘ニ据置クコトトセリ是レ改
正案ノ骨子ナリ然ルニ委員會ニ於テハ之ヲ
中央ノ勅任文官全部ニ及ホスハ不當ナリト
シテ修正ヲ加ヘラレタリ此ノ修正ハ原則ニ
於テ原案ニ同意セサルモノカ將タ又程度ニ
於テ之ニ同意セサルモノカ惑ナキコト能ハ

ス何レニセヨ現行規程ニ比スレハ多少寛和
セラレタルニ相違ナキモ政府ハ此ノ點ニ付
テハ遺憾ナカラ同意ヲ表シ兼ヌル次第ニシ
テ今日ノ場合縱ヒ原案ノ通りナラストモ今
少シク範圍ヲ廣クスルコト可ナリト信ス乍
去本案審査以來多クノ日子ヲ費シ此ノ上尚
右ノ見解ヲ固持シテ永ク本案ノ成立ヲ妨ク
ルコトハ行政上遺憾至極ナリ故ニ此ノ點ハ
同意シ難キモ此ノ場合強テ固執セス寧ク速
ニ修正ニ依リテ本案ノ成立ヲ見ルコト國家

ノ為ニ適當ナリト考フ申ス迄モナク今日ノ
時勢ハ甚ク面倒ナル状態ナルコト各位御承
知ノ通りナリ行政上多大ノ注意ヲ要スル有
様ニシテ從來ノ法制ニハ此ノ新事態ニ適合
セサルモノアリ人心ヲ寬和シ國家ヲ安泰ナ
ラシムル為漸次官制其ノ他ニ適當ナル改正
ヲ加フルコト必要ナリ今日ハ強テ論議ヲ重
ネテ修正案ノ成立ヲ妨クルノ意思ナキモ他
日ノ為ニ人心ノ變化ニ考ヘ十分ノ御用意ヲ
願ヒ置ク次第ナリ要スルニ今日審議セラレ

ル諸案ニハ大躰同意ヲ表ス唯右ノ一點ハ反
對ナルモノ固執セズ成立ヲ希望スルモノナリ
十七番(細川) 委員長ノ縷々ノ報告ヲ謹承シ又
總理大臣ノ簡單ナル演述ヲ聴キタリ總理大
臣ハ或ル點ニ付遺憾ノ意ヲ表セラレタルモ
本案ニ付テハ委員諸君ノ一通リナラサル盡
力ノ結果辛ウシテ協調ノ成立ヲ見タル次第
ニシテ今日ノ場合如何トモスヘカラナルコ
トト考フ本案ハ廣瀬ナルカ故ニ別ニ議論ナ
クハ讀會ヲ省略シ且朗讀ヲ省略シテ直ニ採

決アラムコトヲ請フ

十八番(九鬼) 同意

十九番(金子) 賛成

議長(清浦) 唯今十七番ノ發議アリ別ニ發議ナ

キニ付讀會ヲ省略シニ直ニ採決スヘシ原案

賛成ノ諸君ノ起立ヲ請フ

(全會一致可決)

(午後零時二十分閉會)

副議長子爵清浦奎吾

書記官長ニト云ク

書記官

清水澄

村上恭一

勅令第

第

國務院官制

第一條 國務院ハ内閣總理大臣ノ管理ニ属シ

左ニ掲グル事務ヲ掌ル

一^五 軍需工業勳賞法施行ニ関スル事項ノ統

轄ノ事務

二^六 前掲ノ統轄ノ為ニ必要ナル事項ノ執行

ノ事務

七 軍需工業復員ニ関スル調査事務

三^一 行政各部統計ノ統一ニ関スル事務

國務院

國務院

附
密
院

四^二 行政各部：専属セサル統計ニ関スル事

務

五^三 統計ニ關スル報告ノ刊行及ニ關スル事

務

六。内外統計表ノ交換ニ關スル事務

七^四 統計職員ノ養成並各官廳ノ統計主任者

ノ招集及會議ニ關スル事務

第二條 國勢院ニ左ノ職員ヲ置ク

總裁

親任

部長

二人

勅任

書記官

專任四人

奏任

事務官

專任二人

奏任

統計官

專任二人

奏任

技師

專任五人

奏任

統計官補

專任二人

判任

属

專任三十四人

判任

技手

專任十二人

判任

前項事務官ノ外内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ

關係各廳高等官ノ中ヨリ内閣ニ於テ事務官

ヲ命スルコトヲ得

編
者
院

第三條 國勢院：總裁官房及左ノ二部ヲ置ク

第一部

第二部

第一部：於テハ第一條第一號及乃至第二四

號ニ掲クル事務ヲ掌ル

第二部：於テハ第一條第三五號乃至第七號

ニ掲クル事務ヲ掌ル

第四條 第二條職責ノ外第一部ノ事院務ニ參

與セシムル為參與ヲ置ク

陸軍次官及海軍次官ハ之ヲ參與トス

前項ノ規定ニ依ルノ外參與ハ内閣總理大臣

ノ奏請ニ依リ陸軍省、海軍省、農商務省、逓信省

其ノ他ノ關係各廳勅任官又ハ學識經驗アル

者ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ス

參與ハ勅任官ノ待遇トス但シ本官ヲ有スル

者ニ付テハ本官ノ受クル待遇ニ依ル

第五條 總裁ハ所屬職責ヲ統督シ院務ヲ總理

シ判任官以下ノ進退ヲ專行ス

第六條 部長ハ總裁ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理ス

第七條 書記官及事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ院

務ヲ分掌ス

第八條 統計官ハ上官ノ命ヲ承ケ各種ノ統計ヲ掌ル

第九條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十條 統計官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ統計ニ

従事ス

第十一條 属ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十二條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

軍需局官制ハ之ヲ廢止ス

勅令第 號

鐵道省官制

第一條 鐵道大臣ハ國有鐵道及其ノ附帶ノ業

務ヲ管理シ地方鐵道及軌道ヲ監督ス

鐵道大臣ハ南滿洲鐵道株式會社ノ鐵道及航

路ニ關スル業務ヲ監督ス

第二條 大臣官房ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外職負ノ養成保健鐵道衛生ニ關スル事務及鐵道業務ニ關スル研究ヲ掌ル

第三條 鐵道省專任參事官ハ三人專任書記官ハ十七人ヲ以テ定員トス

第四條 鐵道省ニ左ノ六局ヲ置ク

監督局

運輸局

建設局

工務局

工作局

經理局

第五條 監督局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 地方鐵道ノ免許及軌道ノ特許ニ關スル事項

二 地方鐵道及軌道ノ監督ニ關スル事項

三 地方鐵道ノ補助ニ關スル事項

四 南滿洲鐵道株式會社ノ鐵道及航路ノ監督ニ關スル事項

第六條 運輸局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 國有鐵道ノ運輸及其ノ附帶ノ業務ニ
關スル事項

二 國有鐵道ト他ノ鐵道軌道及航路トノ聯
絡運輸ニ關スル事項

第七條 建設局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 新設線路ノ調査計劃ニ關スル事項

二 新設ノ線路及建造物ノ工事ニ關スル事
項

第八條 工務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 土地線路及建造物ノ保存及管理ニ關ス
ル事項

二 線路及建造物ノ改良ニ關スル事項

第九條 工作局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 車輛ノ製作保存及改良ニ關スル事項

二 工場作業ニ關スル事項

三 電力設備ノ新設保存及改良ニ關スル事
項

四 電力ノ發生及配給ニ關スル事項

第十條 經理局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 本省所管ノ經費及諸收入ノ豫算決算並

會計ニ関スル事項

二 會計ノ監査ニ関スル事項

三 本省所管ノ官有財産及物品ニ関スル事項

項

第十一條 鐵道省ニ技監一人ヲ置ク勅任トス

技術ヲ統理ス

第十二條 鐵道省ニ專任事務官三十一人ヲ置

ク奏任トス上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第十三條 鐵道省ニ專任技師百五十一人ヲ置

ク奏任トス但シ内五人ヲ勅任ト為スコトヲ

得

技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十四條 鐵道省專任屬ハ七百二十六人ヲ以

テ定員トス

第十五條 鐵道省ニ專任技手六百八十五人ヲ

置ク判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事

ス

第十六條 鐵道大臣ハ鐵道ノ建設改良又ハ工

作ニ関スル事務ヲ取扱フ為必要アリト認め

ルトキハ地方ニ事務所ヲ設クルコトヲ得

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

鐵道院官制及大正二年勅令第七十五號ハ之ヲ

廢止ス

別ニ定ムルモノヲ除クノ外他ノ勅令中鐵道院

トアルハ鐵道省鐵道院總裁トアルハ鐵道大臣

トス

勅令第

號

第一條 鐵道省官制施行ノ際現ニ鐵道院職負

ニシテ本院建設事務所又ハ改良事務所ニ在

勤スル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキ

ハ鐵道院參事ハ鐵道書記官ニ鐵道院副參事

及鐵道院參事補ハ鐵道省事務官ニ鐵道院技

師ハ鐵道技師ニ鐵道院書記ハ鐵道屬ニ鐵道

院技手ハ鐵道技手ニ同官等俸給ヲ以テ任セ

ラレタルモノトス

第二條 鐵道局官制施行ノ際現ニ鐵道院職負

ニシテ本院建設事務所及改良事務所以外ノ

部局ニ在勤スル者別ニ辭令書ヲ交付セラレ

廿ルトキハ鐵道院理事ハ鐵道局長ニ鐵道
 參事ハ鐵道局參事ニ鐵道院副參事ハ鐵道局
 副參事ニ鐵道院參事補ハ鐵道局參事補ニ鐵
 道院技師ハ鐵道局技師ニ鐵道院書記ハ鐵道
 局書記ニ鐵道院技手ハ鐵道局技手ニ鐵道院
 鐵道手ハ鐵道局鐵道手ニ同官等俸給ヲ以テ
 任セラルタルモノトス但シ高等官一等ノ鐵
 道院理事ニシテ鐵道局長ニ任セラルタル者
 ハ其ノ在官中ニ限リ仍從前ノ官等及俸給ヲ
 保有ス

第三條 鐵道省官制及鐵道局官制施行ノ際現

ニ鐵道院副參事鐵道院參事補鐵道院技師鐵
 道院書記鐵道院技手ノ官又ハ鐵道院鐵道手
 ノ職ニ在ル者ハ同官制施行ノ際ニ限リ鐵道
 院副參事ハ鐵道省事務官又ハ鐵道局副參事
 ニ鐵道院參事補ハ鐵道局參事補ニ鐵道院技
 師ハ鐵道局技師又ハ鐵道局技師ニ鐵道院書記
 ハ鐵道局書記又ハ鐵道局書記ニ鐵道院技手ハ鐵
 道局技手又ハ鐵道局技手ニ鐵道院鐵道手ハ鐵
 道局鐵道手ニ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得

鐵道省官制施行ノ際現ニ鐵道院參事補ニシテ本院ニ在勤スル者ハ同官制施行ノ際ニ限リ鐵道省事務官ニ特ニ之ヲ任用スルコトヲ得

第四條 鐵道省官制施行ノ際現ニ鐵道院理事ニシテ臨時西比利亞ニ於ケル鐵道事務ニ従事スル者ニ付テハ明治三十七年勅令第百九十五號第一項及第二項ヲ準用ス

第五條 他ノ勅令中給與等ニ付テハ在職年數ニ関スル規定ノ適用ニ付テハ鐵道院職員トシ

テノ在職ト看做ス

鐵道局書記ノ任用ニ関シテハ當分ノ内從前ノ鐵道院書記ノ任用ニ関スル規定ヲ準用ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

勅令第 號

各省官制通則中左ノ通改ニス

第一條中「逓信」ノ下ニ「及鐵道」ヲ加フ

第七條第二項但書ヲ削ル

第十條中大臣官房ノ事務ヲ各局ニ於テヲ大臣

官房ノ事務ハ各局ニ於テ又ハ特ニ局ヲ設ケテ

之ヲ改メ同條第四項ヲ削ル

第十四條中參政官及副參政官ヲ削ル

第十七條 削除

第十七條ノ二及第十七條ノ三ヲ削ル

第十九條ニ左ノ一項ヲ加フ

參事官ハ各省一人ヲ限り之ヲ勅任ト為スコ

トヲ得

第二十三條第二項ヲ削ル

第二十四條中參任官又ハ判任官ヲ高等官ニ改

ム

第二十六條 削除

第二十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

參事官書記官屬及前項ノ規定ニ依ル職責ノ

定員ハ各省官制ノ定ムル所ニ依ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正三年勅令第二百七號附則但書ヲ削ル

勅令第 號

文官任用令中左ノ通改正ス

第三條但書ヲ削ル

第三條ノ二 前二條ノ規定ニ依ル資格ヲ有セ

ス學識經驗アル者ハ高等試験委員ノ銓衡ヲ

經テ之ヲ勅任文官ニ任用スルコトヲ得但シ

左ニ掲グル勅任文官ニ付テハ此ノ限ニ在ラ

ス

内務監察官

税関長

稅務監督局長

鑛務署長

逓信監察官

逓信局長

朝鮮總督府道知事

北海道廳長官

北海道廳内務部長

府縣知事

左ニ掲グル勅任文官ハ前二條ノ規定ニ依ル

資格ヲ有セサルモ各其ノ職務ニ必要ナル學

識技能及經驗ヲ有スル者ヨリ高等試験委員

ノ銓衡ヲ經テ之ヲ任用スルコトヲ得

製鐵所長官

海外駐劄財務官

製鐵所次長

專賣局長官

國勢院部長

印刷局長

造幣局長

專賣局部長

干住製絨所長

維新史料編纂事務局長

朝鮮總督府營林廠長

朝鮮總督府平壤鑛業所長

臺灣總督府專賣局長

臺灣總督府營林局長

第六條中「三年以上」ヲ「二年以上」ニ「五年以上」ヲ「四

年以上」ニ改ム

第七條中「教官」ヲ「學校長」「教官」ニ改ムニ左ノ一項

ヲ加フ

學校長ハ前項ノ規定ニ依リ之ヲ任用スル
トヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

勅令第

號

外交官領事官及書記生任用令中左ノ通改正ス
第五條：左ノ一項ヲ加フ

外務書記生試験規則ハ外務大臣之ヲ定ム

第七條

外交及通商ノ事務ニ必要ナル學識技

能及經驗アルヲ有スル者ハ本令ノ規程ニ拘

ラス高等試験委員ノ銓衡ヲ經之ヲ勅任外

交官又ハ勅任領事官ニ任用スルコトヲ得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

勅令第

號

奏任文官特別任用令

第一條

別ニ定ムルモノヲ除クノ外左ニ掲ク

○ル 奏任文官ハ五年以上判任以上ノ官ニ在職

○ニテ 行政事務ニ従事シ判任官五級俸以上ノ

○俸 給ヲ受ケタル者ヨリ高等試験委員ノ銓衡

○ヲ 經テ之ヲ任用スルコトヲ得

外務省警視

造神宮主事

明治神宮造營局主事

專賣局副參事

專賣局參事補

主稅局事務官

稅務監督局事務官

司稅官

副司稅官

關稅官

監獄事務官

裁判所書記長

典獄

典獄補

製鐵所副參事

山林事務官補

度量衡事務官

為替貯金局副事務官

通信局副事務官

通信副事務官

為替貯金局事務官補

通信局事務官補

通信事務官補

遞信事務官

鐵道省事務官

鐵道局副參事

鐵道局參事補

朝鮮總督府醫院事務官

朝鮮總督府道警視

朝鮮總督府遞信副事務官

朝鮮總督府遞信事務官補

朝鮮總督府裁判所書記長

朝鮮總督府典獄

朝鮮總督府高等土地調查委員會事務局副事務官

朝鮮總督府濟生院主事

朝鮮總督府府尹

朝鮮總督府府事務官

朝鮮總督府郡守

朝鮮總督府島司

臺灣總督府典獄

臺灣總督府典獄補

臺灣總督府醫院事務官

臺灣總督府稅務官

臺灣總督府稅關事務官

臺灣總督府稅關監視官

臺灣總督府專賣局腦務監督官

臺灣總督府覆審法院書記長

臺灣總督府通信事務官

臺灣總督府通信事務官補

臺灣總督府鐵道部事務官補

臺灣總督府警察官及司獄官練習所舎監

臺灣總督府廳長

臺灣總督府廳事務官

臺灣總督府廳警視

臺灣總督府蕃務警視

閩東廳警視

抽
密
院

編
纂
院

関東廳典獄

関東廳通信事務官

関東廳通信事務官補

関東廳事務官補

樺太廳事務官

樺太廳鐵道事務官

樺太廳通信事務官

樺太廳支廳長

貴族院守衛長

衆議院守衛長

警視廳消防部長

警視廳消防司令

監察官補入警視廳

警視及大阪府警視刑事

警視廳北海道廳及府縣警視務警視廳警視消防勤務

大阪府警視監警視廳署長

補入警視限

北海道廳及府縣理事官

北海道廳支廳長

島司

補
密
院

郡長

第二條

左ニ掲クル諸官ニ付テハ前條ノ規定

ヲ適用セズ

各廳參事官

各道參事

各廳書記官

內務監察官

海外駐劄財務官

稅關長

稅務監督局長

鑛務署長

逋信監察官

航路標識管理所長

朝鮮總督府稅關長

朝鮮總督府營林廠長

臺灣總督府警務官

臺灣總督府稅關長

關東廳警務官

樺太廳各部長

警視廳官房主事

警視廳各部長

消防部長

府縣各部長

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス但シ判任官ノ特別任用

ニ関シテハ仍從前ノ例ニ依ル

鐵道院職負特別任用令

大正七年勅令第二百九十四號

明治三十年勅令第百三號

大正四年勅令第七十七號

大正二年勅令第二百七十八號

專賣局職負特別任用令

大正七年勅令第二百七十三號

稅務監督局及稅務署職負特別任用令

大正八年勅令第三百三十六號

明治三十年勅令第二百五十五號

明治三十年勅令第二百二十二號

監獄職負特別任用令

大正二年勅令第二百三十七號

大正三年勅令第六十九號

明治三十一年勅令第十八號

明治四十年勅令第二百七十五號

大正八年勅令第二百四十二號

為替貯金局及地方遞信官署職負特別任用令

大正五年勅令第三十二號

明治二十九年勅令第百五十六號

朝鮮總督府及所屬官署職負特別任用令

大正七年勅令第百六十九號

明治四十三年勅令第三百二號

朝鮮總督府遞信官署職負特別任用令

朝鮮總督府裁判所書記長及裁判所書記特別

任用令

朝鮮總督府典獄及看守長特別任用令

大正七年勅令第三百七十九號

大正二年勅令第百一號

朝鮮總督府地方廳職負特別任用令

明治四十三年勅令第百七十九號

明治四十五年勅令第五十四號

明治四十四年勅令第二百五十九號

臺灣總督府監獄職負特別任用令

明治三十九年勅令第百十五號

明治三十七年勅令第百二十五號

臺灣總督府稅関事務官、税関監視官特別任用

令

大正八年勅令第三百一號

明治四十一年勅令第百五號

臺灣總督府通信事務官通信事務官補特別任

用令

大正八年勅令第三百二十八號

明治四十四年勅令第二百六十五號

臺灣總督府作業所事務官特別任用令

臺灣總督府師範學校長臺灣總督府中學校長

臺灣總督府高等女學校長臺灣公立高等普通

學校長及臺灣公立女子高等普通學校長特別

任用令

大正八年勅令第七十六號

大正八年勅令第七十五號

大正八年勅令第七十七號

大正八年勅令第七十九號

大正七年勅令第二百八十九號

明治三十三年勅令第三百十號

臺灣總督府地方職員特別任用令

臺灣總督府廳事務官及廳警視特別任用令

大正四年勅令第百三十五號

関東都督府職員特別任用令

大正八年勅令第百九十八號

旅順工科學堂學長特別任用令

明治四十三年勅令第百八十號

樺太廳及所屬官署職員特別任用令

大正五年勅令第百五十一號

警視廳職員特別任用令

大正二年勅令第百三十號

明治三十二年勅令第三號

明治四十年勅令第二百七十四號

大正七年勅令第百五十號

府縣立師範學校長特別任用令

勅令第

號

大正二年勅令第二百六十二號中左ノ通改正ス

第一條 左ニ掲クル諸官ニハ文官任用令、文官

分限令、文官分限令並高等官官等俸給令第四

條及第五條ノ規定ヲ適用セス

内閣書記官長

法制局長官

拓殖局長官

各省次官

内務省警保局長

勅任ノ各省参事官

警視總監

貴族院書記官長

衆議院書記官長

秘書官

第二條中「教官」ヲ「學校長」教官ニ改メ特別ノ學術

技藝ヲ要スル文官ノ下ニ及勅任文官」文官任用

令第三條ノ二ニ掲グル勅任文官勅任外交官及

勅任領事官ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十六年勅令第二百八十五號ハ之ヲ廢止

ス

勅令第 號

第一條 辯護士タル者ヲ判事又ハ檢事ニ任用スル場合ニ於ケル初叙官等ハ辯護士ノ職ニ在ル實務ニ従事スルコト六年ニ及フ者ハ高等官五等以下トシ其ノ在職年数三年ヲ加フル毎ニ一等ヲ進ムルコトヲ得

第二條 前ニ高等文官ノ職ニ在リタル者ニ付テハ退官又ハ退職後ハ辯護士ノ在職實務ニ従事スル年数三年ニ付其ノ退官又ハ退職ノ時ニ於ケル官等ニ一等ヲ進ムルコトヲ得

前項ノ規定ハ高等官官等俸給令第四條第二項及第三項ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

高等官官等俸給令第四條第二項又ハ第三項ノ規定ニ依リ再任ノ場合ニ叙シ得ル官等ハ第一項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ退官又ハ退職ノ時ニ於ケル官等ト看做ス

明治三十六年勅令第二百八十五號ノ特別文官ノ職ニ在リタル者ノ轉任又ハ再任ノ場合ニ於テ同令ニ依リ叙シ得ル官等ハ第一項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ退官ノ時ニ於ケル

官等ト看做ス

第三條 本令ニ依ル判事又ハ檢事カ判事又ハ

檢事ニ轉任又ハ再任スル場合ニ於テハ明治

三十六年勅令第二百八十五號ノ規定ヲ適用

セシ

第三條 本令ハ親任判事ニ之ヲ適用セス

第四條 本令ハ辯護士タル者ヲ朝鮮總督府ノ

判事檢事又ハ臺灣總督府法院若ハ閩東廳法

院ノ判官檢察官ニ任用スル場合ニ於ケル官

等ニ付之ヲ準用ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス